

リルケとカフカ (III)

序説—リルケとカフカは出会ったか? (後篇—I)

河 中 正 彦

第 I 章 比較史の諸問題

〔I—6 H・ポリツァーのプラハ講演〕

前号の末尾で我々は、リルケとカフカの出会いについて新事実が得られればそれを報告するし、さもなければマルコム・パスリーの指摘した「カフカがリルケに及ぼした広範な影響」を検討することを約した。前者については、ドイツ本国、特にミュンヘンでフィールド・ワークを行う以外にはもはや展望はないと考える。従ってパスリー・テーゼの検討に移ることになるのだが、その前の手順として、これまで両者がどのように比較されて来たかを総括してから、その成果を踏まえてパスリー・テーゼの検討に移るのが順当ではないかと思う。なぜなら、1916年11月10日のミュンヘンでの両者の邂逅という仮定の下に、リルケはカフカから影響を受けたと推定しているのは、つまり直接の影響関係を論じているのは、今の所マルコム・パスリー (1968) だけであり、これを検討した後で一般的な比較史を論述するのでは、気抜けがしてしまうからである。パスリーも非常に粗略ながら、比較史の歴史的総括から話を始めており、その伝統の総括は直接の影響関係に手順として先行すべきものと考えている。

リルケとカフカの名を初めて対等に並べて比較する試みは、何時始まったのだろうか? それは多分、ハインツ・ポリツァーが1933年4月、プラハの文芸芸術家協会の依頼で『リルケとカフカ』というタイトルで講演したのを以て、嚆矢とする。当時若き詩人として、またカフカ研究者としてプラハに住んでいたポリツァーのこの講演題目は、今でこそさして奇矯に響かないかもしれない。しかしリルケ

Die Entstehung dieser Abhandlung verdanke ich der Abexander-von-Humboldt-Stiftung, die mir den Studienaufenthalt vom 1. Mai 1984 bis 31. Dezember 1985 ermöglichte.

の死後七年、すでに大詩人として世界的に認められていた Rilke に対し、カフカの名はまだ世界的には無名に近く、この両者の名を対等な重みで並べることが、当時どんな破天荒な冒険であったかは、もはや今日では思い浮べるのが難しい。「プラハ新聞」の伝える所によれば (Prager Presse. 1933年 4月15日号)、当時の精神の危機の問題にあくまでも固執しながら、最後にそれにひとつの解答を与えようとしたこの講演は、両詩人を次のように扱っている。

Rilke は、カスナーがすでに納得のいくような仕方でも明らかにしたように、奇妙なキリスト教徒なのであって、彼にとって神と同義であるこの愛する世界に、その分だけ一層直截に没頭できるように、媒介者キリストを克服しようとしたキリスト教徒なのである。

それに対してカフカは、自分の意に反した熱心^{ゼーローグアイ}党員であり、地上における神の代理人である父、巨人の域にまで高められた父の像との闘いに自分の生を擦り減らした。

両詩人はともに彼らの青春の自虐や物怖じした痛苦から、無限なものへと帰郷して行くのだが、それは彼らが自虐や痛苦を作品の中に形象化しえたからである。

ポリツァーは Rilke の『オルフォイスへのソネット』から或る詩を例にとって、非実体化された「永遠性の微光」を響きと形象と意味によってこの詩人が詩の価値に封じ込めようとした事を例示した。カフカはそれに対して、叙事的な起伏を述べながら、この経過の超感覚的な意味をも同時に述べるという「叙事詩の同時性」を達成している。つまり存在と象徴を同時に一つのものとして述べているのである。

キリスト教徒である Rilke は、母を探しに出かけて、^{はは} 娘たちの所へ戻る道を見出したが、それはそこからの風のそよぎが、彼を感受へとさしまねくその大地が、そっくりそのまま神に充ち溢れていて、讚美に価するからである。それに対しユダヤ人カフカは、故郷の町プラハの歴史的憂愁と単調さを耐え抜いて、遂には肺患ゆえの衰弱が彼の作品を完成させることの可能性から彼を押し去り、彼の作品に唯一の形式、つまり彼の作品にふさわしい断片という形式を与えたのだ。

ロダンとの邂逅後の Rilke の後期作品は、どんな芸術的尺度でも測れないものとなる。それは生物学的・形而下的であると同時に、宗教的な現象であり、もしそれが余りにも豊かな心が無限の中へ溢出したものとして現われるならば、例えばアンゲルス・ジレージウスの『知天使ケルビムのさすらい人』を継承したかも知れないような、汎神論に依るキリスト教の克服なのだ。

フランツ・カフカの作品も同様に美学には近寄り難いものである。彼の本質は魂と信仰のそれであるが、しかしその本質は、父子相剋のいさかきを、人間の神に対する闘いへと高め聖化することによって、この父子相剋の精神分析的な根源状況を克服するのだ。カフカの作品は、畏怖にみちた暗闇の中での、深く根を張った一神教のふしぎな光輝を帯びた証拠物件であり、救いをもたらす信仰の慰めである。(Politzer I と略記。論文末参照)

1933年といえば、ポリツァーはまだ弱冠二十三才の青年であり、1929年にウィーンからプラハにきた彼はカール大学でカフカ研究によって博士号を得たばかりであった。三月に試験を済ませたばかりの若いドクトルに、文芸芸術家協会が四月中旬の講演を依頼したものと思われる。この講演は彼の全力を挙げてのものだったに違いなく、プラーガー・プレッセの匿名子は、ポリツァーの感動的な詳論が、現在から連れ去られ、震憾されて再び現在へと連れもどされた聴衆によって、温い理解と感謝と共に受け容れられた、と報じている。

ポリツァーはこうして、カフカとリルケの比較史に輝やかな先鞭をつけたが、それ以降久しくこの延長線上では語らなかつた。第二次大戦中をイエルサレムで過ごした彼は、マルティン・ブーバーとの語らいから励起を受け、ドイツ・ユダヤ人の共生情況の文学史を書く計画を立て、モーゼス・メンデルスゾーンやハイネやベルネについての章を書き、その掉尾^{とうび}をフランツ・カフカの章が飾るはずであったが、この最終章はメモと構想に終り、書き上げられた部分も出版されなかつた。

ポリツァーのプラハ講演の豊かな内容を今すべて検討し尽すわけにはいかない。リルケとキリスト教の関係、カスナーのテーゼを検証するだけでも優に独立した論考を要求するから。しかしこのポリツァーの講演には、若さから来る大胆な本性格があることだけは確認できよう。たとえその若さが時として裏目に出ている所があるとしても。例えばリルケを無媒介にジレージウスのバロック神秘主義と結びつける主張などがそうで、メーテルリンクをくぐり、ロシア正教の神秘主義に影響を受けているリルケを、無媒介にバロックと結びつけるのは少し問題があるように思われる。神秘主義者リルケという視点は、多くの文献が示すように、むしろ当時の一般の見解だったが、この問題は改めて厳密に検討されねばならないだろう。ポリツァーの講演は多くの重要な問題を投げかけており、後年のポリツァーはこれほど核心に迫った本性格でカフカとリルケを比較しなかつたように思われる。

〔I-7 ポリツァーのプラハ詩人論〕

ポリツァーが再びカフカとリルケの名を並べるのは、「プラハとリルケ・カフカ・ヴェルフェル文学の起源」(1955年、以下 Polizer II と略記)、及び「ジレーネの沈黙」(1976年、Polizer III)である。ここにはより豊かな知識と成熟がある代りに、プラハ講演にみられた、あの急込むようなひたむきさはもうない。ポリツァーの第二の比較論は、ヴェルフェルも混えて、これらの詩人に共通な文学的出発点としてのプラハに焦点をしばったものであった。19世紀後半に急速に都市化したプラハが、いかにドイツ人・ユダヤ人・チェコ人の間に不可避な葛藤をもたらしたか、この葛藤が彼らの詩的出発をいかに規定したかが、ここで考察されている。

プラハを中心とするボヘミアの工業化、プラハの都市化については既にかなり詳しく触れたので(拙論「リルケとスラヴ世界」、山口大学・文学会志、第38号、1987、p.106-109)、ここでは簡略に述べるが、1840年代には、ほぼ10万の都市にすぎず、その $\frac{2}{3}$ はドイツ語人口であったプラハの町は、1900年には45万の都市になり、ドイツ語人口は7.5%に減じた。近郊を併合するたびに、いわば外から内へと肥大したこの都市では、その60年間にチェコ人は4万弱から40万人以上にも増加し、ドイツ人の政治的ヘゲモニーは失なわれた。他方、ハプスブルク帝国で、人口は17%、面積は19%を占めるにすぎなかったボヘミアは、工業生産では実にその75%を占めたのだから、ボヘミアは二重帝国の、文字通り「工場」であった。60年前には鋪石の間に草の生えていた田舎町は、一挙にプロレタリア(その大部分はチェコ人だった)の溢れる大都市となり、はじめて階級の問題が顕在化するとともに、それが民族闘争となって露頭して来た。

ポリツァーがプラハの詩人論を、都市の観点から説き起しているのは、だから正しいのだ。リルケはスミホフの労働者を歌って、「彼らの低い光沢のない額には、汗と煤とで困窮と書き込まれている」(SW I 47)と記したが、このような自然主義的な詩は、ほんの数十年前のプラハでは、書こうにも書きようがなかったのだ。都市化に伴う階層分化は、一方では現代文学の特質をなす〈自意識の文学〉を可能にする〈遊民〉的な存在様式を発生させる基盤を提供したし、他方では意識の抽象化が不可避的に伴う無邪気さや自然性の喪失と、従ってまたそれらへの回帰の願望を生みだした。ポリツァーの所論をより良く理解するためには、このような補完が必要だ。というのも、なぜプラハのドイツ語作家たち(ブロート、リルケ、ヴェルフェル。カフカの場合は登場人物はどの民族に属するか必ずしも

明らかではない) が、あんなにも特別の想い入れを込めてチェコ人たちを描いたのか、はこを措いては理解できないからである。チェコ人は彼らにとって、何か「心の故郷」のようなものを意味していた。これは二つの相を持っている。ひとつはチェコ人の召使いに乳母や子守り女に育てられた幼児体験であり、他の一つは成人してからのスラヴ的なものへの覚醒である。

チェコ人を描くドイツ語作家の伝統は、マリー・エーブナー・エッセンバッハに始まっている。それまでは単に「滑稽な人物」の役所やくどころしか与えられなかったチェコ人、さもなければ「がんこで、無学で、ずうずうしく、おせっかいな、成り上った振りをしていても召使いに生まれついた」(Politzer II 55) 人間として描かれて来たチェコ人を再評価してみせたのは、ポリツァーの指摘するようにヤロスラフ・ハシェクではなく、エーブナー・エッセンバッハだった。この点ではマックス・ブロート (Brod I, 9—10) や、ヨーゼフ・ミュールベルガー (Mühlberger 177f.) の方が正しい。エーブナー・エッセンバッハは、ドイツ人の側からチェコ人を初めて内面を備えた人間として、『ボジェナ』(1876年) や『ゲマインデキント (みなし児)』(1887年) で描いた作家だった。母を早く失い、チェコ人の乳母アニチカやペピンカに育てられた彼女は、最初の言葉としてチェコ語を覚えた。リルケやカフカの世代もやはりチェコ人の子守りの世話になっていると思われる。

リルケは、ダーフィット＝ローンフェルトという初恋の人に宛てた手紙で(1894年12月4日)、「良心も道徳もない女中」のことを語っている。

《君はぼくの誤った子供時代の光のとほしい過去を知っているし、ぼくが幼い日々は何ひとつ、或いはほとんど悦ばしいことを知らなかった事に責任を負っている人々を識っているね。一日の大部分をぼくは良心も道徳もない女中の手にゆだねられていたのだ。ぼくが彼女の最初の手近な世話の対象だったらしいが、彼女がぼくを愛したのは新しい服を着てぼくの前でファッション・ショウをやってみせる時だけだった。》
(Leppin 631)

断定はできないが、多分この女中はチェコ女性だったのではなからうか？リルケがあんなにもプラハを憎んだのは、幼児体験がいかに無残なものだったことに依るだろうが、しかしリルケにもチェコ人の女中とのほのかに楽しい思い出もなかった訳ではないだろう。例えばフーゴー・ロキータは次のように書いている。

《フィア夫人は、天気によければ自分の息子をつれてゾフィー島 (注—モルダウ川の小島) で女友達たちのサークルに加わって午後を過した。チェコ人の召使いたちは、ベーミッシュと呼ばれていたが、彼らの言葉は料理女や子守り女と交わる家事の場で用いられるだけであった。このような少女たちは、何度も

子供のリルケと夕べのお祈りをとなえたり、彼をチェコ語の子守り歌で寝かしつけるのであった。》
(Rokyta 37)

引用文は講演を文章化したもので、註がなく、従って情報源が不明だし、ここで言う召使い達がリルケ家のか、それとも女友達たちのかも判然としないのだが、リルケが幼児期に悪くない形でチェコ女性と接触したこともあったように思われる。これらの接触なしには子供の頃のリルケがチェコ語を話せたはずがない。ヘッダ・ザウアーの回想によれば、リルケは8才の頃、散歩の折に身につけていたペンダントのマリア像が体に触れてチクチクするのを、“Panna Maria m e skrábe”とチェコ語で語った。(Mágr 84)

リルケの母フィアは、チェコ国家の独立(1918年)後、チェコの祝祭日に国旗を掲げなかったので罰された程、ドイツ国粹主義的だったから、彼女はリルケの子供の頃毎日三語ずつフランス語を教え、学校でチェコ語で話しかけられたら、フランス語で答えるように仕向けた。(Sieber 31, 72)だとすれば益々リルケはチェコ人の子守りを通じてチェコ語を学んだのではないか、という推測が強まるのである。当時プラハで女中といえば、まずチェコ人と相場が決っていた。そうでなければ地方から来た、チェコ語しかしゃべれないユダヤ女性だった。後者の例は、カフカの家の「家政婦」(F 247) マリー・ヴェルナーである。

カフカはフェリーツェ・パウアーに「乳母、年老いた子守り女、皮肉な料理女、陰気な家庭教師」(F 193)について語っているが、最後の家庭教師、フランス人でフランス語を教えたベリー嬢を除けば、彼女たちはすべてチェコ語を話す女性たちだった。彼女たちのうちで名前まで解っているのは、アンナ・ポウザロヴァ(1902年秋—1903年秋)だが、彼女は明らかにチェコ人である。マリー・ヴェルナーについては、ヴァーゲンバッハによれば(Wagenbach 26)、店を両親が開いて以来カフカ家に居たことになっているが、最近の研究によれば(Binder + Parik 15)、彼女はカフカよりむしろ一才年下で、そんなことはありえなかった。カフカの子守りをしたのは別の女性である。カフカはこの女性については、彼女が久しぶりにカフカ家を再訪した際のことを、1911年11月21日の日記でかなり詳しく述べている。カフカは相前後して二度も訪問してくれた彼女に会っていない。一度目は不在、二度目は居留守をつかっている。カフカは彼女の教育を極めて否定的に受けとめていて、彼女になつかしさを感じていないのだ。

《なぜ彼女はぼくをあんなにひどく育てたんだろう。ぼくはとても従順だったのに。彼女自身が今そのことを客間で料理女とフロイライン(注—マリー・ヴェ

ルナーのこと。彼女はカフカ家では“Sle c na”と呼ばれていたが、これはドイツ語の“Fräulein”に当る。cf. Wagenbach 26) に話している。ぼくの気質は落ち着いていて、お利口だった。なぜ彼女はこれをぼくのために善用し、ぼくにまじな未来を用意してくれなかったんだろう?》 (T 170)

かつての子守女がカフカのことを賞めちぎるのをカフカは隣室で眠ろうとして眠れぬままに皮肉な気持で聴いている。料理女が、「あの方は、どんな寄り道もせずにすぐに天国にいらっしゃるでしょう」というのを聞いて、カフカは「その通りになるだろう」と黒いユーモアで反応している。なぜかつての子守り女がカフカを現在では好意的に受けとめているのに、子供の頃ひどい扱いをしたのかという疑問に対して、ピンダーは (Binder + Parik 15) カフカの父が絶えず召使たちにどなりちらしていたので、その腹いせにその息子に仕返したのであろう、としている。このような出来事は、繰り返されるとカフカの精神的発達によくない影響を与えたに違いない。事実カフカは、乳母や年寄りの子守り女、料理女たちと「殴り合い」(F 193) をした、と述べている。もしこれが単に比喩的な意味で、葛藤をくりかえしたという程のことを示すにすぎないとしても、その軋轢あつれきはかなりひどかったのだらう。カフカの両親は店に行き、彼を顧みる暇があまりなかった。

このようにみるとリルケもカフカも、子守り女については余り良い思い出を抱いていない。にもかかわらず両者の作品にはチェコ人がよく登場する。カフカの場合は、登場人物の民族性がよくわからないのだが、パーヴェル・アイスナーは、『審判』のレーニヤや『城』のオルガやペーピはチェコ女性だとしている (Eisner 86)、ポリツァーもこれらの名前はドイツ人とチェコ人に共通の名だとしながらも、アイスナーの同定を首肯している。(Politzer II 56) ポリツァーはまた、『審判』のヨーゼフ・K. の同僚、ラーベンシュタイナーはドイツ人、クリッヒはチェコ人、カミーナーはユダヤ人だと述べ、K. は「全世界にむけて」(Politzer II 56) 逮捕されたのだとしている。

リルケも自分の作品に多くのチェコ人を登場させた。ただ彼の作品にチェコ人が登場するためには、少年リルケのイデオロギー、ドイツ国粋主義と軍人への志望から来る軍国主義から解放される必要があった。少年リルケは学校でチェコ語を学ぶのを拒否する程 (Sieber 72)、またベルタ・ズットナーの小説『武器を捨てよ』(1892) の平和主義に、すぐさま抗議の詩を書く程 (SW III 415—416)、愛国少年であったが、エルンスト・ツィンの考証によれば、1892年の盛夏か秋に作家志望の決意を固めると同時に、それまでの愛郷的・軍国的な理想も放棄した (SW

III 861)。両親や近親に軍人志望が多かったことから不可避免的に植えつけられて来たドイツ・ナショナリズムから解放されるや否や、リルケは極めて積極的にチェコ人に眼を向け始める。『守護神への捧げもの』(1895)には、ユリウス・ツァイアー(SW I 35)が、ヤロスラフ・ヴルヒリッキー(同 20)が、カエタン・ティール(同 38)が歌われ、ドイツ人の名は、歴史上の人物を除いてはほとんど挙げられない。当時のプラハ文学の法皇だったフーゴー・ザールスやフリードリッヒ・アードラー、或いはコンペルトやマイスナーやハルトマンの名が挙ってもよさそうなのに、彼はそれを意図的に抑えている。リルケはプラハを、ドイツ・プラハとしてでなく、チェコ・プラハとして描出したかったのではなからうか？この詩集に収められた「疑わしき場合には」という詩で、自分の政治的立場を述べている。

《民族の間の荒々しい闘いの音は、
ぼくの所へは全く響いてこない。
私はどちらの側にも立ってはいない。
正しさはどちらの側にもないのだから。

私はホラチウスを忘れたことがないから、
すべての世界に好意的なままでいる。
そして確固として「黄金の中庸」に
昔ながらに頼ってしよう。》(SW I 42)

確かに不偏不党の立場が謳われてはいる。しかしこの詩集全体の重心はグッとチェコ側に傾^{かた}いでいて、とてものことに中立とは思えない。むしろここでの立場の宣命は、ドイツ人でありながらドイツを裏切っている(「疑わしき場合には」!)、というドイツ国粹主義の側からの批判に対する予備防禦ではなかつただろうか？またはたせるかなこの詩集はチェコ人の中で好評だった。チェコ人の秀れた批評家フランティšek・クレイチャーは、『展望』(Krejč i “Rozhledy” 5. Jg Nr. 6)に、極めて好意的な書評を書いた。彼はボヘミアのドイツ文学の最近の低調をなげき、大ブルジョワのカジノ・リベラリズムに漬った文学、型にはまった衰弱した文学をこきおろした後、「今漸くデヴェューして来たドイツ人の若い世代は、ここかしこで今までとはちがった風に考えたり感じたりし始めている。その衝撃的な例が、ルネ・マリア・リルケの《守護神への捧げもの》という小詩集である。」とこの作

品を讃えた。

クレイチャーはまた「チェコ的なものに対する共感、我々チェコ人の作家の場合は自明なものだが、ドイツ人の作家の場合には大変な大胆さと独創性の証しだ」とも述べている。チェコ語が話せるということが、すでに民族的な裏切りと看做されるような当時のプラハ・ドイツ人社会のカジノ・リベラリズムの風潮のなかで、リルケのようにチェコ人への共感を謳い上げるのは、危険なことであり、また勇気を要することでもあった。しかしこのような政治的な立場の宣明の下には、もっと根源的な人間観・民族観が潜んでいたのではないか？リルケは『プラハのふたつの物語』の自薦文で(SW VI 1210)、「スラヴ的なあこがれは彼らの声の中にあり、彼らは擦り減らされていない感情の初葉の Frömmigkeit によって生きている」と述べている。このドイツ語はなんとも訳しがたい。単なる宗教的敬虔さというのともちがう。単に信心ぶった抹香くさきさではなく、人間が失ってはならないナイーブさ、篤実さというか真心というか、或いはハートとでもいうか、とにかく心のほくほくとした或る核心のようなものなのだ。この言葉は実はフランツ・ヴェルフエルが、彼の家の女中、チェコ人のバルバーラに捧げた小説『バルバーラ、或いは Frömmigkeit』というタイトルと不思議に一致している。この言葉こそドイツ人がチェコ人の特性をもし一語で表現せよと言われたら、ためらうことなく選んだであろうような見出し語なのだ。ヴィリー・ハースがヴェルフエルの家を訪れると、まず女中のバルバーラに挨拶をさせられた、という程(Haas 19)、彼女はヴェルフエルの家で重んじられ、ヴェルフエルの彼女に対する敬愛と親和はそれ程までに強かったのだ。ヴェルフエルは彼女を主人公にした小説を二度書いている。『バルバーラ』(1929)と『横領された天国』(1939)の女中テータ・リーネクである。ヴェルフエルは、リルケやカフカより家が裕福だったので、女中の対遇もよく、従って人間関係もしっかりとしていたのだろう。

マックス・プロートの場合は、母親がヒステリーだったので両親の間に不和が絶えず、女中が絶え間なく交代したようだ。プロートは『論争家の生涯』で、両親の結婚後数年は仲もよく、従って忠実な召使いたちもいたが、しだいに女中たちは彼の母にとって「あばずれ」と見え始め、自分の指示にことごとく反する事をめざしているように思え始めた。勿論これは彼女の攻撃的^{わがまま}心性、我儘、杓子定規なまでの几帳面さによるのであって、彼女の要求に添うのは不可能に近かった。彼女の怒りに触れて女中たちは「一・二週間」(Brod II 116)で交代した。そしてこの「永遠の闘争」は、家の平和と一致とを除々に掘りくずして行き、遂には女中のひとりが台所のバルコニーから投身自殺をする事態まで起きた。(Brod II

ブロートは多分彼女たちの一人をモデルに『チェコ人の女中』(1907)を書いたのだ。若きブロートの無関心主義(Indifferentismus)は、定家のような紅旗征^{せいじゆう}戒は我事にあらず、とうそぶく類の審美主義ではなく、ショーペンハウアーの人間意志の決定論——「起ることは、必然性ととも起る」(Quidquid fit, necessario fit)——によって、自己行為の非自由性の教説によって、どんな積極性も萎えさせられた結果として生じる、殆んど近代的ニヒリズムとってよいものなのだ。(Raabe 255) ブロートは、ゲーテのファウストの有名な文句を逆転させる。「人間は迷う限りは、努めるものだ。」と。(Brod III 505f.)「誤解と嘘だけが運動を可能にする。そして生存は……否、生存には目的などない、と僕はいいたくない。しかし僕のような人間にとっては、確かに生存は目的がないのだ。」(ibid.)

このような「無関心主義」はしかし束の間チェコ人の女中への愛によって破られる。「まるで外界が、さもなくば閉ざされた精神にひとつの侵入個所を持っているかのようだった。」(Brod IV 34) 主人公ウィリアム・シューアハフトはウィーンからプラハに来て、会計士として働いている間に、店の女中ペビー・ヴルコヴァが好きになってしまう。彼は彼女に服をプレゼントし、すぐに試着してみてくださいらんと「駅の近くのホテル」(Brod IV 105)に連れこみ、彼女をものにしてしまう。彼女は実は夫のある身(ポツカルのいかだ師)であったが、やがて夫婦のいさかいから自殺してしまう。(ibid. 121) 主人公は再び「以前の暗い無価値のなかに沈んでゆく」(ibid. 124)といった話である。

扱て我々は長い迂路の後で、ポリツァーの所論にもどろう。彼のプラハ文学論を秀れたものにしてしているのは、プラハ文学の道行きを、〈都市批判〉(プラハは、ドイツ・プラハとして批判される)から、チェコ人の発見へ、そしてポーランド(カフカの場合)やロシア(リルケとヴェルフェル)など東欧の共同体への志向として描いた所にある。しかしこの特異性は必ずしもこの論文で明瞭な線として際立ってはこない。それを浮き立たせるには、余計ともみえる長い迂回路が必要だったのだ。

ポリツァーは、リルケがヴォルガの村のひとつで、ロシア人の農婦に別れのキスを受け、「あんたも多分民衆のひとりなんだよ」と言われた時、「この生きた共同体との接触がプラハの大学生を詩人リルケに変えたのだ」としている。(Politzer II 57)

カフカについては、「当時カフカは、民族共同体としてのチェコ人やユダヤ人に視線を向けざるをえなかったように見える。その共同体は、カフカを受け容れ、またカフカは、彼らの文学への献身から逆に恩恵を受けるように思われたのだ」と述べている。(ibid. 60)

ヴェルフェルの場合は、「リルケやカフカより若かったヴェルフェルは、彼ら二人が夢想だにしなかった程、革命の諸理念にコミットした。1918年のウィーン革命への悲喜劇的な参加へと彼を導いた彼の政治的態度は、主にドストエフスキーの宗教性によって鼓吹されたものであった。」(ibid. 57)

リルケやカフカの幼児期のチェコ人との接触は、必ずしも親和的な面ばかりではなかったようだが、しかしリルケのチェコ人への思い入れの深さは、彼の初期作品、特に『守護神への捧げもの』と『プラハの二つの物語』に明らかであり、カフカの場合ユダヤ人女性ではあったが、チェコ語しか話さないマリー・ヴェルナーとの心からの人間関係は、カフカにとって大切なものであった。ビンダーに依れば、彼女はカフカの大学生の頃から始まり (Binder + Parik 15)、毎朝彼を起すのは彼女の役目であり (F 355)、彼は彼女の劇場の切符を世話したり (Br. 426)、彼女の誕生日には骨の先にボンボン (キャンディー) をくくりつけた雨傘をプレゼントしたり (Brod I 116—7) したのだった。またカフカの家には、1890年に三人のチェコ女性、乳母、子守り、料理女と一緒に棲んでいたことも、人口統計で明らかになっている。(Binder + Parik 15)

リルケもカフカも一日の大部分は子守りの手に委ねられている一時期を幼児に送り、ヴェルフェルもプロートもチェコ人の女中に世話されている。母親以上に親密な親和の対象であったチェコ女性のスラヴ性 (Frömmigkeit) が、後にリルケをロシアに狩り立て、カフカをポーランド・ユダヤ人の宗教的共同体へ、ヴェルフェルをドストエフスキーの宗教性へと導く火口になったと言え、決定論的に過ぎようか？

しかし19世紀後半のボヘミアの急激な工業化が、プラハにも資本主義の諸矛盾と都市の問題を露頭させ、その結果としてプラハ文学は、一方では都市批判を、他方ではその必然の帰結として「前近代的なものへの郷愁」を抱くに到ったのは明らかである。そしてその際個々の詩人は幼児体験としてスラヴの女性と接触する機会をもち、その接触 (Frömmigkeit) の体験は、スラヴ世界における人間の「前近代的な共同体的存在様式」への志向性として深化された事、これはプラハ

近代ドイツ文学の方向を大きく規定したと言ってよい。ポリツァーのプラハ詩人論は、余り鮮明でない形で、しかし初めてこの重要な方向性を示唆した所があったように思われる。そしてこの主線をさらに鮮明にしたのが、J. P. スターンであった。

〔I—8 スターンの比較〕

J. P. スターンは、『フランツ・カフカの世界』（1980）の序文で次のように述べている。

《リルケ（1875—1926）とカフカ（1883—1924）は生まれた町が同じで、同時代人であった。二人ともドイツ語圏のスラヴ的周辺の出身で、半ダースかそれ位の作家たちの間に立ち混っていたが、彼らはゲーテ時代以来我々が経験しなかったような、ドイツ文学の偉大な時代を築き上げたのである。しかしこの二人の文学への貢献ほどに異なったものも稀であろう。》（Stern 2）

スターンはわずか数頁の文章のなかで、極めて緊密に興味ある項目をひろい挙げているので、それをまとめてみよう。

- 1) 伝記上の共通項として。二人ともプラハの中心街のドイツ語学校に通ったこと。また同じ小数派の文化（ドイツ人の）に属したこと。
- 2) 二人とも貧しくなり、存亡の危機にさらされた言語的遺産「プラハ・ドイツ語」で育ったこと。そしてその生命性の欠如、妙に正確な所、を意識していたこと。しかもその話し手は「格調ある美しいドイツ語」という称讃を要求し、この称讃には彼らはきまり悪がっていたが、他方その称讃を共にしてもいたこと。
- 3) 自分たちの環境の反チェコの雰囲気をもよおし、チェコ人社会に対して温い共感を寄せたこと。
- 4) 彼らはドイツ人でもオーストリー人でもなく、一時的に「社会主義的共感」を抱いたが、二人とも恒常的にどんな民族的・政治的な運動とも一致することがなかった。
- 5) 彼らは生まれた環境を、抑圧的であり、時にはやっかいなものと感じ、東方（東欧）に「現実」（リルケ）と本当の生（カフカ）を求めた。即ち、リルケはロシアに旅し（1900）、カフカは1910年にプラハに客演したイディッシュ演劇と接

触を持った。

- 6) 二人とも自分たちの文学的使命に全くとりつかれており、行く手に立ち塞がるすべての人や物に不安と、時には恐怖を抱いてみていた。
- 7) 二人とも文学運動に対してどんな持続的な接触も持たなかった。二人とも彼らの孤立と孤独を、文学創造の、つまり生の必要条件とみなしていた。
- 8) リルケは絶えず動いており、カフカはやましげに自分の根源（出身地）に忠実であり続けた。これは伝記的な意味でも、文学の意味でもそうである。
- 9) リルケの『マルテ』の最後に置かれた放蕩息子の話は、カフカの『帰郷』と比べられる。しかしリルケの放蕩息子が過剰な両親の愛を拒絶するのに対し、カフカの『帰郷』は親密さに対する恐れ、いや、それ所か、そのひどい渴望を表現している。
- 10) リルケの第四『悲歌』にみられるような巨大な存在論的な言説は、カフカには対応物が見出し難い。カフカの日記や手紙には自信のなさにふちどられていて、リルケの言説の詩的な自信、リルケがそれで形而上学を築く豪華なメタファーはカフカにはみられない。
- 11) リルケの主要な媒体は詩であり、カフカのそれは散文である。二人の相異なる創造力は、しかし深く似かよった〈喪失〉の体験を共有する。だがリルケはその体験を詩作品に秘めてしまう。それに対しカフカはそれを隠さず、それに忠実である。これがカフカの文学が直ちに私の注意を引いてしまう理由である。この〈喪失〉の体験は、〈内面の神話〉ともいうべきもので、外部世界は喪なわれてしまう。(Stern 3—5)

スターンはここで実に多くの興味深い問題点を提起している。しかしリルケやカフカのように一生をかけても究め難いような大詩人の場合、比較はどちらかについての知識の欠如に基いて行なわれ易い。例えば10) のようなテーゼは、もしカフカのアフォリズムをも文学作品と考えれば、とうてい主張できないものだろう。カフカにはカフカの存在論があり(「所有はない、ただ存在があるだけだ。最後の呼吸を、窒息を求める存在があるだけだ。」[H 42 Nr. 35] 及び H 43 Nr. 37をも参照)、もし形而上学という概念を否定的な面でだけ捕えないなら、カフカの作品もリルケのそれと同様、形而上学的なメタファーに溢れている。カフカの思想的断章や作品に現われる存在論、倫理学、認識論は、リルケのそれと比較可能であり、これはいずれ徹底的に試みたい主題である。

スターンの比較は、概略的にはおおむね正しいが、ひとつひとつのテーゼに一章をさいて検討してゆけば、どのひとつとしてそのままに首肯できないものとなるだろう。しかしこの課題は、我々が Rilke と Kafka の比較を本格的に始めてから漸く実質的に検証されることになるだろう。今ここでは単にスターンが指摘した比較点を挙示するに止めよう。

〔I—9 比較のプログラム〕

我々はここで、ポリツァーの二つの論文とスターンのものを紹介・検討した。そして次号に於いて、ハッセルブラット、マルコム・パスリー、ウルリッヒ・フェレボルン、アンソニー・スティーヴンス、ベルト・ナーゲル〔末尾参照〕らの比較を検討することになるだろう。

しかしその前にこの論文の比較の歴史に基いて、我々の比較の方法とテーマを予告しておきたい。

初期 Rilke 及び初期 Kafka の比較として次のような項目が重要である。

〔A〕初期の Rilke と Kafka

- I) 言語危機——認識の危機と言語危機
- II) 都市批判——虚妄としての都市
- III) 父子相剋——市民社会の批判
- IV) 〈場〉としてのプラハ——生活空間と文学空間

I) 言語危機

言語危機といえば、ひとは殆んど反射的にホーフマンスタールの「チャンドス卿の手紙」を思い出すだろう。しかし1902年に発表されたこの作品より、Rilke は約5年、Kafka は約2年前からすでにこの危機に身をさらしていた、と思われる。Rilke の言語危機は、1897年11月21日、彼が「言葉は単なる壁にすぎない」と書き留めた時、始った。Kafka の場合は、1900年9月4日、ゼルマ・コーンのアルバムに「なぜなら言葉は下手な登山家であり、下手な鋤夫だ。それは山の高みからも、山の奥からも宝を持って帰れない。」と書いたときすでに始っていたといえる。(ここでは原則的に文献を挙示しない。)

ドイツ語圏の言語危機は、事実上オーストリー・ハンガリー帝国に集中的に現象するが、これはドナウ・モルダウ空間が多言語空間であることと不可分である。しかしこの現象としての言語危機は、この空間の外部に二つの震源を持っていた、ニーチェとメーテルリンクである。カフカの言語危機はニーチェ系であり、リルケのそれはメーテルリンクの系列に属している。本格的にはマラルメに始まるフランス象徴主義の言語危機は、ドイツ語圏には直接マラルメからではなく、メーテルリンクを通じて入ってくる。ムージルの言語危機も、マッハの認識批判と言語批判をくぐって、メーテルリンクに出会ったものであった。彼の『テルレス』のエピグラフにはメーテルリンクの『貧者の宝』からの引用がみられる。

カフカの言語危機がニーチェの影響に依ることは、ゼルマ・コーンの回想によって確証される。彼女はカフカとロストックの森の古い榿の木の下に一諸に坐って、彼は彼女にニーチェを朗読して聞かせたという。残念ながらそれがニーチェのどの著作であったかは明らかではない。しかしカフカの、言葉は登山家としても鉱夫としても失格だ、という言説には、ニーチェの次のような断章が対応しているだろう。「言葉は、平均的なもの、中間的なもの、伝えうるもののためにのみ発明されているように見える。語る人は、言葉でもって自分を卑俗化する。」カフカの『ある闘いの記述』の主要動機は、まさに言語危機だといってよい。ここでは単なる予告として詳細な分析は諦めねばならないが、カフカがこの危機を「陸での船酔い」と呼んだことだけは書き留めておこう。

リルケの言語危機は、エルンスト・ツィンの考証に依れば、1897年の秋『ウィーン展望』の第二巻に掲載されたメーテルリンクの『貧者の宝』の「エマーソン」の章に触れたことが契機になっている。ここには「我々は幼年期の初めの数年で失明した人間に似ていないだろうか？……君たちの言葉は彼が知っていることを、一杯のコップの水が大河を表現するのよりずっと不完全にしか表現できない」という言語批判が述べられている。そればかりか、「山の麓で無意味であったこれらの言葉が、山頂の雪の彼方で意味するものを見よ」というメーテルリンクの言葉は、「言葉は壁にすぎない。その彼方、ますます蒼みゆく山々の中で、その意味がほのかに光っている」というリルケの詩句にそのまま通じている。リルケはこの地点から、「言葉が名づけている物と言葉はもはや何ひとつ共有しないように、都市に住む大抵の人達の身振りは、大地への連関を失ってしまった。彼らはいわば空中に浮いていて、グラグラと揺れ、定住する場所をみつけれない」(1902)という認識に達する。

II) 都市批判

リルケの都市批判は「大地への連関を失った」人間の存在様式そのものへの批判として、主に『時禱書』の第三部「貧しさと死の書」に集中的に現われる。しかしこれらパリ体験の所産と見られる作品には、『守護神への捧げもの』におけるプラハの貧しい階層、チェコ人たちへの詩歌が先駆している。これはリルケが自然主義＝社会主義から受け継いだ遺産とみなされてよい。リルケはこの線を独自なく貧しさの哲学へと純化する訳だが、ここでもメーテルリンクの『貧者の宝』は少なからぬ規定力を持ったといえる。

カフカの場合は、散逸した処女作品『子供と町』という作品からして既に都市の主題が採り上げられていたと思われる。ボラク宛の手紙に提案されている穏やかならぬ計画、プラハをヴィシエフラートとフラチーンの両端から放火して焼き払おうという考想は、これも実践的な都市批判である。この考想のすぐあとに続く「恥ずかしがりやのヒョロ長男と心の不正直な男」の話では、前者が田舎に住んでいるのに対し、後者は都市に住んでいる。このように都市と田舎の問題は、倫理の問題に転化される。都市は悪であり、虚偽であるが、田舎は善であり、真実だ。図式化してしまえばこのような対比に帰せられる倫理は、初期のリルケにもカフカにも共通である。彼らにはまたパリ体験も共通項として考えられる。リルケにとってパリは「軍学校」のような体験であった。カフカは1911年夏、プロートとパリへ旅する。しかしカフカは『或る闘いの記述』の中で、「パリには飾りのついた服だけで出来ている人間や正門だけしかない家があるって本当ですか？」

(Be 110) と或る人物にたずねさせているが、これはユーモラスに誇張された虚妄としての都市の批判と考えられる。この作品では地名は沢山現われるが、人名はカボタン通りに住むジェローム・ファロシュというパリジャンしか現われないのも、カフカのパリへの特別な関心の現われであろう。兎も角リルケとカフカの都市批判は総合的な考察に値する大きなテーマである。

III) 父子相剋

リルケは短編「エーヴァルト・トラギー」や「命日」で市民社会の空虚さや表面性をいかに暴いているが、他方カフカは「父への手紙」で父のユダヤ教の空虚さを暴露している。父と子の相剋は、ひとつには世代間の信仰や価値観の相違の葛藤として考察されねばならないが、同時に世俗と芸術（思想）の闘争としても理解されねばならない。さらに父子の葛藤は、<権威＝権力>を廻る問題と

して〈神〉の問題に結びつく。

リルケは「フィレンツェ日記」に、「両親に養なわれ責任を持ってもらうことを、出来る限り望むのは、無能力な人間の本質である。この神が活着している限り、すべての子供たちは成人していない。この神はいつか死なねばならない。我々自身が父親に成ろうと欲しているのだから。」(TF 52) と述べている。カフカは「父への手紙」で玉座の上から世界を支配している父の姿を描いている。(H 169) リルケやカフカの父や家族との相剋は、また時代の問題でもあり、ハーゼンクレーファーの『息子』(1914)、ヴェルフェルの『殺された者に罪がある』(1919)、ブロンネンの『父親殺し』(1920) などとの文脈で考察するべきものである。カフカの『判決』(1912) はこれらの系列の作品のなかでは先駆的であったといえる。

IV) 〈場〉としてのプラハ

〈場〉としてのプラハと言う時、それは生活の場としての意味と作品空間に現われる場としての二重の意味を含意している。紙数も尽きたので簡略に述べるが、カフカの初期作品、特に『或る闘いの記述』や、暗黙のうちにプラハが舞台とわかる『審判』は、いずれもプラハのノイシュタットの辺が物語りの始点の場所となっており、物語りの終点はラウレンツィベルクの方に向う上向のコースを取っている。そしてそれはまた北西に向う行進であり、権力の中核へ誘引されることでもある。この二つの作品ではいずれも血が流れる。『記述』では知人が自分の左の上腕をナイフで「たわむれのように」刺すのだが、『審判』ではヨーゼフ・K. は同じくナイフで心臓を刺され、二度えぐられる。ここには偶然ならぬ暗合が働いているように見える。

それに対してリルケの『守護神への捧げもの』は全く逆のコースを取っている。すなわち、クライン・ザイテのフラチーン城から始って郊外へまで流れ下る線で構成されている。さらにまたリルケのこの詩集や『ふたつのプラハの物語』に現われるおびただしい地名や建物などは、カフカの『記述』のそれと多くの共通なものを持っており、作品のなかでそれらの固有地名の帯びている象徴価は必ずしも究め尽されている訳ではない。



以上、リルケとカフカの比較史をたどりながら、初期リルケと初期カフカの比較的方法的視点を予告的にまとめてみた。次号ではさらに比較史をなぞりながら、

中期及び後期の比較の視点を定めてみたい。

文献と略号

A) Primärliteratur

- 1) **SW**=Rainer Maria Rilke : Sämtliche Werke. Hg. v. Rilke(Archiv.
In Verbindung mit Ruth Sieber Rilke, besorgt durch Ernst
Zinn. (Insel, 1955-66) Bd. I-VI
- 2) **F.**=Franz Kafka : Briefe an Felice (Fischer, 1967)
H.= : Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande
(Fischer, 1966)
T.= : Tagebücher (Fischer, 1948)
- 3) **Ebner-Eschenbach** : Božena in "Novellen" (Winkler, 1957 ;
Lizenzausgabe der WBG)
: Das Gemeindegeld (Winkler, 1957)
- 4) **Franz Werfel** : Barbara oder Die Frömmigkeit
(Fischer Tb. 9233)
: Der unvertreute Himmel (Fischer Tb. 5053)
- 5) **Brod III** : Max Brod : Schloß Nornepygge
(Axel Junker, 1908)
Brod IV : Max Brod : Ein Tschechisches Dienstmädchen
(Axel Junker, 1909)

註

B) Sekundärliteratur

- 1) Binder + Parik= Hartmut Binder + Jan Parik : KAFKA-Ein Leben in Prag
(Mahnert-Lueg, 1982, München)
- 2) Brod I = Max Brod : Der Prager-Kreis (Suhrkamp Tb. 547)
- 3) Brod II = Max Brod : Streitbares Leben (Insel 1979)
- 4) Eisner= Pavel Eisner : Franz Kafka and Prague (Golden Griffin Books
1950)
- 5) Fülleborn= Ulrich Fülleborn : Zu Rilkes Malte und Kafkas Schloß in
"Etudes Germanique" Nr. 4 1975 S.438-454

- 6) Haas= Willy Haas : Die literarische Welt · Erinnerungen (List 174-5)
- 7) Hasselblatt= Dieter Hasselblatt : Zauber und Logik. Eine KAFKA-Studie (Wissenschaft und Politik 1964) 5.Exkurs : Rilke und Kafka S.119-122
- 8) Krejčí= Besprechung des "Larenopfer" Rilkes in "Rozhledy" 1896 6.Nr. 5.Jg.
- 9) Leppin= Paul Leppin : Der 19jährige Rilke in "Literatur" Jg.29 1927, August. H.11 S.630-634
- 10) Mágr= Clara Mágr : Sprach Rilke tschechisch ? in "Blätter der Rilke-Gesellschaft" Heft 13 / 1986 S.83-92
- 11) Mühlberger= Josef Mühlberger : Geschichte der deutschen Literatur in Böhmen 1900-1939 (Langen Müller)
- 12) Nagel= Bert Nagel : Kafka und die Weltliteratur (Winkler 1983)
- 13) Pasley= Malcolm Pasley : Rilke und Kafka Zur Frage ihrer Beziehungen. in "Literatur und Kritik" Nr.24 3.Jg. 1968 S.218-225
- 14) Politzer I = Heinz Politzer : "Über R.M. Rilke and F.Kafka" in "Prager Presse" 13. April 1933
- 15) Politzer II = Heinz Politzer : Prague and the origins of R. M. Rilke, F. Kafka, and F. Werfel. in "Modern Language Quartley" 16.Jg. H. 1 1955. S.49-62
- 16) Politzer III= Heinz Politzer : Das Schweigen der Sirenen (Metzler, 1968) S.13-41
- 17) Raabe= Paul Raabe : Der junge Max Brod (1905-1910) und der Indifferentismus. in "Weltfreunde" (Luchterhand, 1967) S.253-270
- 18) Rokyta= Hugo Rokyta : Der junge René Maria Rilke und Prag. in "Rilke Symposion-R. M. Rilke und Österreich" (Linzer Veranstaltungsgesellschaft 1986.) S.35-38
- 19) Sieber= Carl Sieber : René Rilke-Die Jugend R. M. Rilkes (Insel, 1932)
- 20) Stephens= Anthony Stephens : Zum "Inneren Gericht" bei Kafka und anderen. in "Türen zur Transzendenz" S.70-98 (Evangelische Akademie Hofgeismar, 1978)
- 21) Stern= J. P. Stern : The World of Franz Kafka (Holt, Rinehart and Winston 1980) V.a. Introduction S. 1-7
- 22) Wagenbach= Klaus Wagenbach : Franz Kafka-Eine Biographie seiner Jugend 1883-1912 (Franke 1958)